

- (1) 英語を共通語とする国民統合政策
- (2) 英校の増加・ヴァナキュラー校の相対的衰退
- (3) 華人社会の反発と共産党問題（非常事態）

3. 長期的言語政策の確立

- (1) 全党派委員会報告 1955
- (2) 四言語の平等と二言語教育
- (3) 英語を共通語とする国民統合の必然性

4. PAP の言語政策とその成果

- (1) マラヤ統合のための三言語教育 1960-65年代
- (2) 経済発展のための英語優先政策 1965-70年代
- (3) ヴァナキュラー校の消滅 1986
- (4) 「アジアの価値観」と二言語教育の強化 70年代以降
- (5) 「華語を話そう」運動 1978以降

インドネシア語の場合

佐々木重次

古くからこの群島世界の交易語、共通語として他の言語の追従を許さない長い歴史を持つマレー語は植民地時代には植民地政府の準公用語の地位を与えられていたが、20世紀のインドネシア民族主義の台頭と共に「祖国インドネシア」の民族統合の言語、「インドネシア語」となって独立国家の国語への道を歩んだ。

今日のインドネシア語の普及率は全国平均で約60%。ジャワ、バリなどの強大な地方語圏に100%普及するにはあと半世紀以上かかると推測されている。国はインドネシア語の普及に努めると共に、地方語を民族文化の一部として尊重する政策をとっている。小学校の教育言語は1975年カリキュラムにより1年からインドネシア語によると定められているが、例えば西ジャワ州政府は独自の決定で4年よりとしている。

国民の多くが国語インドネシア語と地方語の二言語使用者となる状況のなかで、インドネシア語の地域方言的なかたちが成立し始める一方で、地方語がインドネシア語の強い影響を被って純粋さを失いつつあると嘆く声も聞かれる。文学者たちの場合、両方の言語で創作活動をするもの（なかには、母語である地方語で純文学を、インドネシア語では金になる風俗小説を、というような使い分け方がある）と、インドネシア語だけで創作活動をするものがある。最大の地方語ジャワ語を母語とする文学者は後者のタイプが多いが、しばしば自分の母語をまじえ過ぎるとの批判を受けもしている。

1988年は「ひとつの祖国、ひとつの民族、ひとつの言語」を誓った1928年の「青年の誓い」60周年を記念する第5回インドネシア語会議が「開発のコンテクストにおいて統一語を尊重する」をテーマに開かれた。第1回会議よりの宿題であった辞書、文法書が刊行された。